



Title	イタリアにおける研究評価をめぐる議論の概要
Author(s)	川島, 彬
Citation	ELSI NOTE. 2022, 16, p. 1-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87526
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



大阪大学 社会技術共創研究センター
Research Center on Ethical, Legal and Social Issues

ELSI NOTE No. 16

2022 年 3 月 24 日

イタリアにおける研究評価をめぐる議論の概要

Author

川島 彬

大阪大学 社会技術共創研究センター 特任研究員

本 ELSI ノートに関する文献調査は、文部科学省「科学技術イノベーション政策における『政策のための科学』基盤的研究・人材育成拠点整備事業（SciREX 事業）」共進化実現プログラム「研究業績の評価に基づく資源配分効果の動態的特性分析のための基礎研究」（共同提案者：標葉隆馬）及び科学研究費助成事業 基盤研究（B）「インパクト評価再考－責任ある研究・イノベーションの観点から」（研究代表者：標葉隆馬）の一環として行ったものである。

目次

0.	はじめに	3
1.	イタリアの人文社会科学研究における書籍の位置付け.....	5
1.1.	ヨーロッパにおける書籍の評価方法	5
1.2.	イタリアの人文社会科学研究の評価における書籍	6
1.2.1.	イタリアの研究評価制度の概要	6
1.2.2.	イタリアの人文科学系の研究者にとっての書籍の位置づけ	7
	【コラム①：イタリアの人文社会科学研究における出版傾向と、ジャーナル評価の試み】	11
	【コラム②：イタリアの法学領域における研究評価】	15
2.	大学の「第三のミッション」をめぐる議論とイタリアの選択.....	19
2.1.	人文社会科学研究におけるインパクト概念をめぐる論争	19
2.1.1.	学問の自由への脅威.....	19
2.1.2.	人文科学研究の非道具的価値.....	19
2.1.3.	官僚化.....	20
2.2.	イタリアのアプローチ.....	20
2.2.1.	包括的定義.....	21
2.2.2.	インフォームド・ピアレビューと「成熟（Maturity）モデル」	21
2.2.3.	第三のミッションの評価の自律	21
3.	研究の「質」の理解に対するひとつのアプローチ	23
3.1.	地域性と結びついた「質」——“regola d’arte”	23
3.2.	時代と結びついた「質」——“sprezzatura”	23
3.3.	まとめ.....	24

参考文献

0. はじめに

人文社会科学をめぐる研究評価の問題は、世界的に大きな議論となりつつある。日本においても、2021年3月27日に閣議決定された科学技術・イノベーション基本計画の中で、人文社会科学をめぐる評価に関わる論点が提示されている（内閣府 2021）。また2021年11月25日には日本学術会議が『提言 学術の振興に寄与する研究評価を目指して一望ましい研究評価に向けた課題と展望―』を公表されているが、その中でも海外の議論状況は重要な情報源として整理が行われている（日本学術会議 2021）。

このような状況を踏まえながら、本ノートは、研究評価をめぐる諸問題に関して、イタリアの研究者たちの議論を紹介することを目的とする。そのために、2018年に出版されたアンドレア・ボナッコルスィ編『人文社会科学における研究評価: イタリアの経験からの教訓』（Bonaccorsi, A. ed. *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*. 以下、本書）に注目し、本書を概観する¹。

ボナッコルスィによれば²、イタリアは人文社会科学の強い伝統を有しており、特に哲学から考古学に至るまでの人文科学の学問領域全体は、中世やルネサンス期以来の長い伝統をもっている。そのため、人文社会科学のコミュニティには活力があり、研究評価に関しても積極的に議論を提起し、行動を起こしている。

ズッカラのまとめによると³、研究評価に関してイタリアの研究者らが掘り下げているトピックには、大きく分けて次の3点が挙げられる。

- A) 評価の対象となる研究成果、研究者、コミュニティなどをラベリングし、分類すること。
- B) 上記のようにラベリングを施された対象を評価する際に助けとなるような、データセッ

¹ 本書には全17編の論文が収録されている。このうち冒頭の論文が編者によるイントロダクションに相当し、残りは全5部構成となっている。第1部「人文社会科学における研究の質の基準」（全4編）、第2部「人文社会科学における書籍及び単著の役割と、その評価」（全4編）、第3部「ジャーナルの分類と格付け」（全2編）、第4部「マルチレベルの研究評価のための新しい指標の探求」（全5編）、第5部「イタリアの経験からわれわれは何を学ぶか」（全1編）。本ノートでは、本文中で4編、【コラム①】と【コラム②】でそれぞれ2編の論文を主に取り上げる。残りの9編については、脚注で簡単に紹介する。注4、13、15、22、37、45を参照。

² Bonaccorsi (2018), vii.

³ Zuccara (2018), 396-97. ズッカラ自身はイタリアの研究機関ではなく、デンマークのコペンハーゲン大学に所属する研究者である。彼女は、いわば外側から、研究評価に関するイタリアの議論状況を分析している。

トやピア・コミュニティを見出し、確立すること。

C) 研究の「質」(quality)を定義・議論し、それによって、インパクトの広い概念を認めること。

以下、A)～C)に関連する、特に重要と思われるポイントを見ていく。A)については、第1節で、イタリアの人文社会科学の研究における書籍の位置付けに関する議論を簡単に紹介する。B)とC)の両方にまたがる論点として、大学の「第三のミッション」に関する議論と、イタリアがその評価方法に関して選んだ道を、第2節で紹介する⁴。第3節では、C)に関連する、「研究の質」をどのようにみなすべきかという問題への一つのアプローチとして、ズッカラによる議論を紹介する。

⁴ 本ノートではデータセットに関する議論は詳しく扱わない。本書の Biagetti et al. (2018b) では、人文社会科学の研究評価において、図書館の蔵書目録に基づく指標を用いることの問題点が指摘される。まず、図書館がある書籍を何冊購入するかは、その書籍の質とは直接関係ない様々な外的要因によっても左右されてしまう。例えば大学図書館の場合、講義の試験科目と関連がある書籍ほど購入されやすい、というように。さらに、蔵書目録に載っている書籍が、図書館の判断で購入されたものなのか、単に寄贈されたものなのかを判別する方法が事実上存在しないのも問題である。同じく、Biagetti et al. (2018a) では、オンライン蔵書目録に関する難点が指摘される。購入／寄贈の区別の他にも、同名著者の区別、異版本の扱い、オーサーシップの正確な付与、共著者の特定などの点で、問題があるとされる。対照的に、本書では、Google Scholar に基づく指標が（条件付きではあるが）有用である可能性が検討されている。Ferrara et al. (2018) は、ASN (Abilitazione Scientifica Nazionale, 国家科学資格) のために候補者が提出した出版物リストのデータベースを用いながら、アルゴリズムによって Google Scholar の有用性を検証している。Biolcati-Rinaldi et al. (2018) は、フェッラーラらの方法論を用いて、社会科学（領域14）の研究者の出版傾向を調査する。彼らは、Google Scholar 上のデータと、研究者の自己申告による出版物のデータ（ANVUR が公開、1.2.1.も参照）とを比較し、Google Scholar 上のデータの有用性確認を試みている。しかし同時に、個々の研究者を評価する際に Google Scholar のデータを用いることに対しては警鐘を鳴らしている。

1. イタリアの人文社会科学研究における書籍の位置付け

本節では、イタリアの人文社会科学⁵研究において、書籍がどのような位置を占めているかを見ていく⁶。そのための準備として、まず、イタリアを除くヨーロッパ諸国において、書籍がどのような仕組みで評価されているかを概観する⁷。

1.1. ヨーロッパにおける書籍の評価方法

イタリア以外のヨーロッパ諸国において、書籍が評価されているシステムは以下の通り。

- 質的評価システム（Qualitative Evaluation System）：イギリス、オランダ

イギリスとオランダでは、提出された成果を、それぞれの学問領域のピアが評価する。イギリスのリサーチ・エクセレンス・フレームワーク（Research Excellence Framework, 以下 REF）では、学問領域は4つのパネルに分けられ⁸、それぞれのパネルは、複数のサブパネルへとさらに区分される。パネルとサブパネルは、自らの領域においてどのようなものが特に評価されているかを考慮に入れる。そして、人文科学と社会科学のそれぞれのパネルでは、もっぱら質的評価がなされる。書籍もまた、そのような質的評価の対象となる。細かな違いはあるものの、オランダも同種の評価システムを採用している。

- 量的（画一的）評価システム（Quantitative (one-size-fits-all) System）：リトアニア、ポーランド、チェコなど多くの旧社会主義国

これらの国々では、異なる種類の研究成果に、特定のポイントが画一的に割り当てられる。例えばポーランドでは、権威あるジャーナル論文には50ポイントが割り当てられるが、単著には

⁵ 本書は人文社会科学全般を扱うものではあるが、章によって、主題が人文科学の場合も社会科学の場合もある。以下、個々の論者が単に“humanities”や“arts and humanities”などと言っている場合「人文科学」を訳語として用い、“SSH (social sciences and humanities)”あるいはそれに類する表現を使っている場合「人文社会科学」を訳語として用いる。

⁶ Williams, et. al. (2018); Faggiolani and Solimine (2018). 【コラム①】及び【コラム②】も参照。

⁷ 韓国、台湾、香港、中国など東アジアにおいて書籍を含む研究成果がどのような仕組みで評価されているかに関しては、佐野編（2020）を参照。欧米諸外国の研究評価制度のより詳細な紹介として、林ほか（2020）を参照。特に人文社会科学の研究評価の現状と課題に関して、標葉（2017）、林ほか（2021）のまとめが役立つ。社会において人文科学に期待される役割の歴史的変化を国際的な視点から追った研究として、Sörlin (2018) を参照。

⁸ 4つのパネルはそれぞれ、医・薬・生命科学、物理・工・数学、社会科学、人文科学。

質にかかわらず 25 ポイントしか付与されない。何を単著とみなすかの基準もまた、画一的に決められる。ポーランドでは、単著とみなされるための条件は、(1) 査読を経ており独自の研究課題を提示していること、(2) 参考文献表があること、(3) 少なくとも 240,000 文字以上あるいは約 36,000 語以上の長さであることであり、これらすべてを満たす必要がある。

- データベースシステム (Data-Base System) : ノルウェイ、デンマーク、フィンランド、ベルギーのフランダース地方、スペイン、ポルトガル

これらの国々では、査読を経た学術文献に関するデータベースを構築・利用することで、ジャーナル論文や書籍といった研究成果に重み付けを行い、異なるポイントを与えている。このポイントは、個人レベルではなく機関レベルでの比較のために用いられる。例えば、このシステムの嚆矢であるノルウェイでは⁹、ジャーナルや出版社がそれぞれレベル 1 とレベル 2 に区別され、ジャーナル論文は、レベル 1 から出版されたものには 1 ポイント、レベル 2 からのもには 3 ポイントが付与される。単著は、レベル 1 から出版されたものには 5 ポイント、レベル 2 からのもには 8 ポイントが付与される。レベル 1、レベル 2 にどのジャーナル・出版社が属するかは、分野ごとに専門家によって決められる。

1.2. イタリアの人文社会科学の研究評価における書籍

1.2.1. イタリアの研究評価制度の概要

イタリアの研究評価は、1993 年に始まった。現在は、ANVUR (Agenzia Nazionale di Valutazione del Sistema Universitario e della Ricerca, 大学システム及び研究評価のための国立機関)¹⁰が行う VQR (Valutazione della Qualità della Ricerca, 研究の質評価) と呼ばれる評価プログラムが実施されている¹¹。VQR では、学部単位での評価を行うために、個々の研究者が提出した研究成

⁹ この「ノルウェイ・モデル」のコンセプトについては、モデルの提言者の一人でもある Sivertsen (2016) が詳しく論じている。特に人文科学との関わりについては、Benneworth et al. (2016) 参照。日本語の文献として、標葉 (2017) ; 林ほか (2021) ; 日本学術会議 (2021) 参照。

¹⁰ ANVUR のホームページとして、<https://www.anvur.it/>参照。同サイトによれば、ANVUR のミッションは、大学及び研究機関の質を評価するための国のシステムを監督することであり、独立性 (independence)、公平性 (impartiality)、専門性 (professionalism) の三つを基本指針とする。ANVUR 設立の経緯とその役割に関しては、関沢 (2021) のまとめが詳しい。

¹¹ ANVUR ウェブサイト内の <https://www.anvur.it/en/activities/vqr/>参照。VQR の目的は、国立の大学・研究機関の研究成果を評価することだが、私立の大学・研究機関であっても、評価を望むなら研究成果を提出することが許されている。VQR 以前には VTR (Valutazione Triennale della Ricerca, 3年周期の研究評価) が2001-2003年に行われていたが、試験的なもので、提出された成果物も約18,000件に過ぎなかった (2004-2010年の VQR では180,000件以上)。

果物が評価される¹²。評価結果は、イタリアの大学システムのために国から配分される交付金である FFO (Fondo di Finanziamento Ordinario, 通常財源基金) の額に反映される。

評価の方法はインフォームド・ピアレビュー¹³である。2011-14 年の VQR では、14 に分けられたそれぞれの学問領域¹⁴を、ANVUR によって任命された専門家が担当し評価した。評価基準は、オリジナリティ、方法論の厳密さ、期待される／潜在的なインパクトの 3 点だった (2004-2010 年の VQR¹⁵における評価基準は、関連性 (relevance)、オリジナリティ／イノベーション、国際化の 3 点)。それぞれの成果物に対して、その質に関する判定がピアによってなされたあと、以下のいずれかの評点が与えられる。「卓越している (1.0)」、「非常によい (0.7)」、「よい (0.4)」、「可である (0.1)」、「劣っている (0)」、「評価の対象外 (0)」¹⁶。

1.2.2. イタリアの人文科学系の研究者にとっての書籍の位置づけ

イタリアでは、RobinBa (**Role of Books in Non-Bibliometric Area**)¹⁷ と呼ばれる調査が 2015-2016 年に行われた。これは、書籍の出版習慣に関する調査を通して、イタリアの特に人文科学の研究者が、自らの研究において書籍の位置付けをどう理解しているかを調べることを目的とした、試験的研究プロジェクトである。イタリアの 2 つの大学 (ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学とマチェラータ大学) が対象として選ばれ、VQR のために提出されたデータの分析、アンケート調査、フォーカスグループが、手法として組み合わせて用いられた。

この調査の結果は、書籍を人文科学の研究におけるもっとも重要な出版物とみなすことに対して、注意を促すものだった。以下の 2 つの円グラフは、調査対象の 2 大学で、2004 年～2014 年

¹² 個々の研究者を評価する仕組みとしては、ASN (Abilitazione Scientifica Nazionale, 国家科学資格) がある。【コラム①】も参照。

¹³ VQR におけるピアレビューの体制、評価基準、評点の付け方などを、国外のピアレビューと比較・検討した研究として、本書の Capaccioni and Spina (2018) 参照。

¹⁴ 14 の領域の指定は、CUN (Consiglio Universitario Nazionale, 国立大学審議会) が行う。それぞれの領域は次の通り。1. 数学とコンピューターサイエンス、2. 物理学、3. 化学、4. 地球科学、5. 生物学、6. 薬学、7. 農学と獣医学、8. 土木工学と建築学、9. 産業工学と情報工学、10. 古典学、文献学、文学、美術史学、11. 歴史学、哲学、教育学、心理学、12. 法学、13. 経済学と統計学、14. 政治及び社会科学。

¹⁵ 2004-2010 年の VQR の人文社会科学のそれぞれの領域 (領域 10～14) の詳細については、【コラム①】参照。同 VQR の「国際化」の基準に関しては、英語の研究成果に機械的に高い評点を与えることにつながるのではないかと懸念が専門家の間で浮上した。この懸念を受けて、特に建築学の研究グループが「国際化」の項目の修正案を提示した。以上の経緯については、本書の Bonaccorsi (2018b) が詳しい。

¹⁶ 2004-2010 年の VQR での評点のつけ方に関しては【コラム①】参照。

¹⁷ Basso et. al. (2017) による RobinBa の最終報告書も参照。この報告書が本書の Williams et. al. (2018) の論文の原型で、ヨーロッパ各国における書籍の評価の仕組み、領域 10 (古典学、文献学、文学、美術史学) と領域 11 (歴史学、哲学、教育学、心理学) における出版の習慣、出版社の評価といった個々の論点について、より詳細に議論されている。

に VQR のために提出された人文科学（領域 10 と 11）の出版物の割合（％）を示している¹⁸。

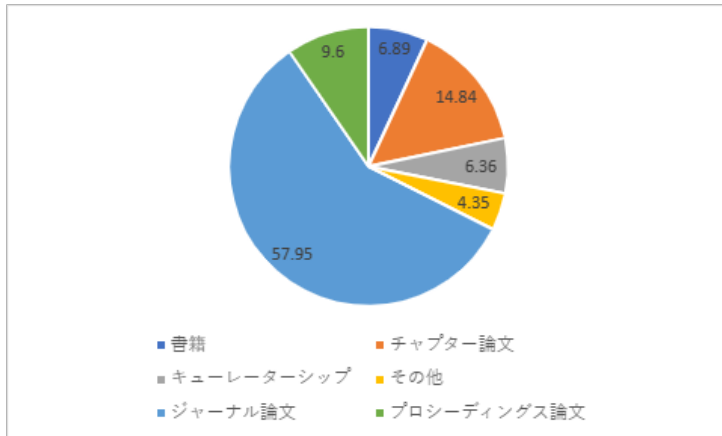


図 1-1 ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学とマチェラータ大学における領域 10 の出版物の割合（2004-2014 年）（出所）Williams et al. (2018), 145.

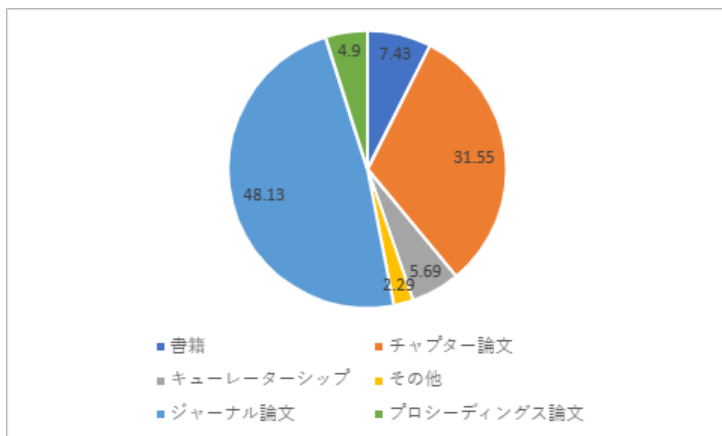


図 1-2 ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学とマチェラータ大学における領域 11 の出版物の割合（2004-2014 年）（出所）Williams et al. (2018), 145.

領域 10 は古典学、文献学、文学、美術史学。領域 11 は歴史学、哲学、教育学、心理学であ

¹⁸ 図 1-1 及び 1-2 中の「キュレータースhip」の中身を Williams らは特定していないが、博物館や美術館での展覧会の企画、カタログの制作など、キュレーター（博物館専門職）としての業績を指すと考えられる。キュレーターの職は、日本の学芸員と重なる部分もあるが、欧米の著名な博物館・美術館の場合、博士号取得者が務めるのが一般的であり、学芸員と比べてはるかに大きな権限をもつことが多い。

る。人文科学はこの2領域でほぼカバーされる¹⁹。注目すべきは、領域10では約60%、領域11では約50%が、ジャーナル論文によって占められている点である。書籍が占める割合は、両分野において7%程度にとどまっている。

さらに、RobinBaの調査によれば、人文科学における研究出版のパターンは近年変化しており、ジャーナル論文を公刊する方向へのシフトがある²⁰。

多くの先行研究が指摘するように²¹、人文科学において、書籍が研究発表のための重要な媒体であることは間違いない。ジャーナル論文の出版のみに着目した指標を用いるのは、イタリアの人文科学の研究評価においても無意味であると考えられている²²。しかし同時に、RobinBaでなされた調査は、とりわけキャリア形成途上の若手研究者の活動を評価する際に書籍をことさらに特別扱いすることの危険性も示唆している。

これには、イタリア特有の以下のような事情が関係している。RobinBaでなされたインタビュー調査によれば、イタリアの人文科学において、単著は「厳格なピアレビューを経た研究成果」とはみなされない傾向にある。実際イタリアでは、異なる出版社を、出版物の質によって分類・格付けすることは困難であるとされる。ファッジョラーニとソリミーネによれば²³、この背景的理由として以下の三点が挙げられる。

- 出版市場が縮小し、人文科学系の研究資金も不足している。こうした状況では、研究者は（ジャーナル論文のような）比較的低コストの出版媒体を選びがちになる。
- どの出版社から書籍を出すかの選択は、出版社の権威や評判以上に、出版資金助成の有無といった外的条件に左右されがちである。
- 大手の出版社は、出版可否の決定を、外から雇われた専門家の意見に委ねるのを拒むことがある。こうした場合、ピアレビューは望めなくなる²⁴。

¹⁹ 【コラム①】で紹介するボナッコルシの研究では、領域8の一部である建築学の分野が人文社会科学に属するとみなされている。

²⁰ Williams et al. (2018), 146.

²¹ 例えば、標葉 (2017), 18-20; 林ほか (2021), 7 参照。

²² 書籍の評価に関しては、本書の Basili and Lanzillo (2018) も参照。彼女たちは国内外の複数の分類システムを比較しながら、書籍としてカウントされるアイテムの種類が、システムごと大きく異なり得ることを指摘する。

²³ Faggiolani and Solimine (2018), 49.

²⁴ 関連する動向として、Routledge を傘下に置く Taylor&Francis による、ジャーナル論文のピアレビューの価格設定

書籍やチャプター論文といった媒体は、最新のアイデアを公刊したいと思っている比較的ベテランの研究者には適しているかもしれない。実際、人文科学系の学部は、所属する研究者に単著の出版を期待する傾向を未だに有している²⁵。しかしだからといって、書籍やチャプター論文が、ピアレビューを経た権威あるジャーナルの論文よりすぐれている、ということにはならない。

を参照。出版までの期間が比較的短いプランで 1 本の論文につき 7000 \$、長いプランでも 3900 \$ の料金がかかる。
<https://taylorandfrancis.com/partnership/commercial/accelerated-publication/>

²⁵ Williams et al (2018), 153. 「あなたの学部では、ジャーナル論文や書籍のチャプター論文と比較して、書籍はどのくらい重要視されていますか？」との質問に対し、回答した領域10（古典学、文献学、文学、美術史学）の研究者の約8割、領域11（歴史学、哲学、教育学、心理学）の研究者の約7割が、ジャーナル論文やチャプター論文よりも書籍の方が重要視されていると答えた。

【コラム①：イタリアの人文社会科学における出版傾向と、ジャーナル評価の試み】

イタリアの人文社会科学全体における出版傾向に関しては、本書収録のイエッツィによる論文が詳しい²⁶。イエッツィは 2004-2010 年実施の VQR で提出された成果物の種類と割合（％）を、領域 10（古典学、文献学、文学、美術史学）、領域 11（歴史学、哲学、教育学、心理学）、領域 12（法学）、領域 13（経済学と統計学）、領域 14（政治及び社会科学）に関して調査する。結果は以下の表の通り。

領域	10	11	12	13	14
ジャーナル論文	26.3	23.9	32.7	61.6	28.1
単著	22.6	32.9	25.8	12.9	34.0
編著	1.8	1.8	0.7	0.6	2.9
チャプター論文	33.1	33.2	36.1	20.5	32.9
プロシーディングス論文	14.3	7.1	3.1	4.1	1.8
その他	2.0	1.2	1.5	0.4	0.4

表 1-1 2004-2010 の VQR で提出された成果物の割合（％）（領域 10-14） Iezzi (2018), 242 の表をもとに作成。

²⁶ Iezzi (2018).

上の表から明らかなように、領域 10（古典学、文献学、文学、美術史学）、領域 11（歴史学、哲学、教育学、心理学）、領域 12（法学）、領域 13（経済学と統計学）、領域 14（政治及び社会科学）は、プロシーディングスの比率が領域 10（古典学、文献学、文学、美術史学）で高く、領域 14（政治及び社会科学）で低いことを除けば、出版傾向がかなりの程度類似している。だが、領域 13（経済学と統計学）では傾向が大きく異なり、ジャーナル論文が圧倒的に重視されているのが見て取れる。実際、領域 13（経済学と統計学）の VQR では、ジャーナル論文以外の成果物が提出されたとしても、極めて低い評点しか与えられない傾向がある。

さらに領域 13（経済学と統計学）は、他の領域と比較して、使用言語として英語を用いる比率も高く、海外の研究者との共著比率も高い（ジャーナル論文で 17.2%、編著で 11.4%）。通常、人文社会科学として一括りにされる領域 13（経済学と統計学）だが、出版傾向の点で他の諸領域とは大きく異なっているのだ。

だが、領域 10～14 に属する計 154 のより細かな学問分野（Settori Scientifico Disciplinari）を見ていくと、事態はさらに複雑なのがわかる。例えば、領域 10（古典学、文献学、文学、美術史学）に属するにもかかわらず、ジャーナル論文の出版に偏っている学問分野や、領域 13（経済学と統計学）に属しながら、書籍の出版傾向が強い学問分野もある。

以上から、研究者の出版傾向は、CUN が指定する（10～14 の）マクロな領域とはぴったり重ならないことをイエッツィは示す。さらに、ミクロな学問分野の出版傾向を考慮した上で、その傾向のパターンに応じて、現在 14 あるマクロな領域の線引きをし直す必要性を示唆する。

次に、イタリアにおけるジャーナル評価に関する議論として、本書収録のボナッコールスィらの論文を紹介する²⁷。彼らは、ANVUR が 2012-2014 年に行った、ジャーナル分類の試みの成果を利用する。この試みは、イタリアの国立大学で准教授や教授に昇進するための要件として用いられている ASN (Abilitazione Scientifica Nazionale, 国家科学資格) のために実施された。ANVUR は、2002-2012 年の間にイタリアの研究者が少なくとも 1 本の論文を公刊したすべてのジャーナルを評価した。その総数は 60,000 件以上にのぼった。

これらのジャーナルは、専門家によって以下のように区分された。まず、ジャーナルの全体が、アカデミックなものと非アカデミックなもの（大衆誌や専門誌など）に分けられた。次にアカデ

²⁷ Bonaccorsi et al (2018).

ミックなジャーナルの全体が、評判やインパクトなどの点ですぐれている「A ランク」のものとその他に分けられた。

ボナッコルシらは、以上の ANVUR によるジャーナルの評価と、2004-2010 年実施の VQR の領域 8 の一部（建築学）、領域 10（古典学、文献学、文学、美術史学）、領域 11（歴史学、哲学、教育学、心理学）、領域 12（法学）、領域 14（政治及び社会科学）で審査を受けた 11,660 本のジャーナル論文の評価結果とを比較する²⁸。VQR で提出された論文にはそれぞれ、A（卓越している）、B（すぐれている）、C（可である）、D（限定的）、非アカデミック及びその他（剽窃など不正行為が認められる）のいずれかの評価が与えられた²⁹。比較の結果は以下の通り。

		A ランクジャーナル	非 A ランクジャーナル	非アカデミックなジャーナル	計
VQR での評価	A	1344	573	20	1937
	B	3184	1743	92	5019
	C	837	1096	80	2498
	D	14	1176	150	2163
	非アカデミック及びその他	14	21	8	43
	計	6701	4609	350	11,660

表 1-2 VQR（2004-2010）での研究成果の評価とジャーナル評価との関連 （出所）Bonaccorsi et al. (2018), 260.

ボナッコルシらは、この結果を様々な角度から検討した上で、提出された論文の評価の高さと、その媒体が「A ランク」のものであることとの間には正の相関があると結論づける。「A ラ

²⁸ 領域13（経済学と統計学）が含まれていないのは、前述のように出版傾向が人文社会科学の他領域と大きく異なるからだろう。

²⁹ それぞれの評点は、A が1.0、B が0.8、C が0.5、D が0、非アカデミックが-1.0、不正などが-2.0。

ンク」のジャーナルから論文を出版した場合、その論文がA（卓越している）の評価を受けるケースが2倍近くまで増えるのだ。

以上をもとにボナッコルスイらは、研究評価において、専門家によるジャーナルの評価・分類が役に立つ可能性を示唆する。大規模な研究評価を実施する際、ジャーナル評価・分類の結果をピアレビューをサポートする道具立てとして活用できると考えられるのだ。

【コラム ②：イタリアの法学領域における研究評価】

人文社会科学の中でも法学は顕著な特徴を有しており、研究評価の文脈でも盛んな議論の対象になっている。本書『人文社会科学における研究評価：イタリアの経験からの教訓』は法学を主に扱った論文を2編収録している。

ペルジネッリとファーロは³⁰、法学の研究評価に関する一般的な諸問題を議論している。法学の研究評価の方式としては、一般的にピアレビューが用いられている。実際、VQRの法学領域（領域12）では、引用データベースによるサポートなしのピアレビュー単独方式が採用されている。これはひとつには、法学で重視される多様な研究成果をカバーできるデータベースが存在しないからである。

しかし同時に、法学におけるピアレビューの不透明さも指摘されており、評価のためのよりクリアな手続きや基準を確立せよとの圧力は近年強まっている。だが現状では、法学研究の「質」をどう理解すべきかに関してさえコンセンサスは得られておらず、建設的な議論は難しい。

こうした状況を踏まえ、ペルジネッリとファーロは、法学の研究評価について議論する際、以下の6つの特徴を考慮に入れる必要があると述べる。

- 法学は一枚岩ではない。例えば、税法と比較法学では、用いられるコミュニケーションツールが大きく異なる。
- 法学における研究・出版と実践との間には強い結びつきがある。例えば、多くの法学のジャーナルでは、法曹が直面する実際的な問題についての寄稿を受け入れている。
- 複数の「文献ジャンル」があり、それぞれに特有の価値がある。単著、チャプター論文、ジャーナル論文、判決や立法に関するコメント、レビューなど、チャンネルは様々である。しばしば、単著は新しい知識の拡散のために、チャプター論文やジャーナル論文は履歴書の内容を充実させるために用いられる。
- 法学研究には（特有の）社会的インパクトがある。例えば、論文を寄稿する目的が、特定の問題に関する裁判所の指針に変化を与えるため、ということもあり得る。
- 法学はシステムに拘束された性質をもっている。国内法に決定的な影響を与えるような

³⁰ Peruginelli and Faro (2018).

研究であっても、国外ではほとんど出版されない傾向がある。国内法のシステムは、国外の研究者にとって、馴染みのない基盤に依拠しており、理解しがたい規則によって統制されていることも多いからだ。例えば、エストニアの法学ジャーナルは、ポルトガルの最高裁判所が下した判決に関する論文を掲載する気には（その判決が、ポルトガル国外でも重要な特別の事情でもない限り）ほとんどならないだろう。

- 法学においては著者の役割が独特である。物理学、化学、数学など定量的な関係を厳密に測定することができる科学分野では、引用者（著者）の層と論文読者の層が重なることが多いが、法学ではこの 2 つの層はあまり重ならない。また、これらの分野と異なり、法学では単独での研究が一般的である。

さらに、イタリアの法学の研究評価の文脈で、盛んに議論されるトピックとして、以下の諸点が挙げられる。

- 評価の対象となる研究成果の範囲
- 「国際化」の評価方法
- 法学における文献引用の意味
- 単独ピアレビュー方式維持の必要性
- 出版者、ジャーナル、編集シリーズなどのランキングの可否
- 社会的インパクトの計測方法
- 引用データベース構築の可否

他方³¹、イタリアの法学における単著の評価について議論もなされている。2015 年に、ITTIG (Istituto di Teoria e Tecniche dell' Informazione Giuridica, 法情報の理論及び技術に関する機構) によって、イタリアの法学研究における単著の評価に関する研究が行われた。この ITTIG プロジェクトの目的は、法学の単著をピアレビューする際にサポートになるような、計量書誌学的指標があるかどうかを検証することだった。その過程で、単著をピアレビューする際、質やイン

³¹ Peruginelli et al. (2018).

パクトに関する指標をサポートとして用いることに関して、法学研究者がどのような見解を抱いているかが、アンケート調査された。ペルジネッリらは、この調査結果に着目する。

ITTIG プロジェクトのアンケート調査では、単著の「質」として、以下の3つが区別された。

- A) 狭義の研究の質
- B) 研究者共同体に及ぼすインパクト
- C) 社会的インパクト

回答者である法学研究者には15の様々な指標が提示され、A)、B)、C)のそれぞれの評価に際して、どの程度有用と考えられるか示すよう求められた。選択肢は、有用性が「高い」「ある程度高い」「低い」「ない」の4つ。法学全体では、以下の結果が得られた。

順位	狭義の研究の質	研究者共同体に及ぼすインパクト	社会的インパクト
1 位	特別な諸特徴(レビュープロセス等)を有した特定のシリーズに収録されている	特別な諸特徴(レビュープロセス等)を有した特定のシリーズに収録されている	国立図書館や国際的なライブラリーの蔵書目録に登録されている
2 位	出版社	国立図書館や国際的なライブラリーの蔵書目録に登録されている	出版社
3 位	国立図書館や国際的なライブラリーの蔵書目録に登録されている	出版社	特別な諸特徴(レビュープロセス等)を有した特定のシリーズに収録されている
4 位	学術誌で書評がなされている	学術誌で書評がなされている	ダウンロード数(オンラインで利用可能な単著の場合)
5 位	学術誌で報告がなされている	特定の(高ランクの)学術誌で書評がなされている	販売部数

表 1-3 狭義の研究の質、研究者共同体に及ぼすインパクト、社会的インパクトの指標のランキング1～5位(全回答者)
(出所) Peruginelli et al. (2018), 222.

このうち特に「狭義の研究の質」に関して、1位の「特別な諸特徴(レビュープロセス等)」を

有した特定のシリーズに収録されている」と3位の「図書館や国際・ライブラリーの蔵書目録に登録されている」は、法学の全分野で4位以内に入り、全般的に、重要な指標とみなされていることがわかる。しかし、2位の「出版社」を含むその他の指標は、分野によってはあまり重視されていない。例えば税法分野では、「出版社」は9位に入るに過ぎない。法学の領域が一枚岩ではないことが確認される。

以上の結果を含む ITTIG プロジェクトの分析を踏まえ、ペルジネッリはいくつか論点を提示する。以下の2点が特に興味深い。

- 「出版社やシリーズのランキングは、単著の評価において役に立つか」との質問に対しては、回答者の80%近くが「いいえ」と回答した。しかし前述のように、「特別な諸特徴（レビュープロセス等）を有した特定のシリーズに収録されているかどうか」や「出版社」は、評価においてある程度役に立つ指標とみなされている。実際のところ法学研究者は、シリーズや出版者のランキングめいたものが存在することを暗に認めている。彼らが拒否感を示しているのは、この暗黙のランキングが定式化されてしまうことの方なのだ。
- 回答者の52%が、評価のプロセスにおいて、単著の情報を含む引用データベースがあれば、ツールとして役に立つだろうと答えた。他方で、こうしたデータベース構築のアイデアに反対する回答者も相当数おり、法学研究における引用の習慣に関連する懸念が表明された。すなわち、法学研究者には、特定のテーマについて利用可能なあらゆる文献にメンションする傾向があるため、引用されている文献が、著者によって有益であるとみなされているとは限らない、との懸念である。

2. 大学の「第三のミッション」をめぐる議論とイタリアの選択

2.1. 人文社会科学におけるインパクト概念をめぐる論争

大学が社会に対してもたらすインパクトを巡る論争の中で「人文社会科学の研究者は第三のミッションをもつべきか」という点が盛んに議論されている。伝統的に、教育と研究の二つが大学の果たすべきミッションとされてきたが、これらに加えて、大学は、社会的要求や経済的ニーズに応えるための活動（第三のミッション）も行うべきとの声が近年高まった。従来、第三のミッションに関する議論の多くはSTEM（科学・技術・工学・数学）分野に集中し、これらの分野の研究がもたらす経済的価値に焦点が当てられてきた。だが、英国のREFで「インパクト」が全学問分野共通の評価項目になったのがひとつの契機となり、人文社会科学も第三のミッションと無縁ではいられなくなった。しかし、それに対する人文社会科学の研究者の反応は様々である。以下、ブラースィらのまとめに従って³²、いくつかの主要な立場を簡単に紹介する。

2.1.1. 学問の自由への脅威

フーコーやブルデュー³³の議論の影響を受けた研究者の中には、インパクトを求めることにより、大学は自律性を喪失し、市場原理による支配に服するようになってしまふことを懸念する論者がいる。

2.1.2. 人文科学の研究の非道具的価値

ヌスバウムの示唆によれば³⁴、人文科学の研究は、市民の批判的思考を創造し、形成するための必要不可欠な構成要素であり、その意味で（道具的ではない）内在的価値を有している。人文科学の研究の主たる成果が、そのような教育過程に存するのだとしたら、人文科学のもたらす影

³² Blasi et. al. (2018), 362-67.

³³ Foucault (2001); Bourdieu (1984).

³⁴ Nussbaum (2012). ヌスバウムはさらに、人文科学の研究は民主主義の維持のためにも不可欠であると論じる。この主張に対しては、これでは、人文科学を民主主義維持のための道具として扱っているに等しいのではないかと批判がある。Blasi, et. al. (2018), 366 参照。ヌスバウム自身は論じていないが、特定の政治システム（あるいはイデオロギー）としての民主主義と（批判的合理性を伴った）「民主主義的精神」とでも呼ぶべきものを区別すべきだろう。彼女の基本的洞察を擁護するためには、その上で、前者ではなく後者の民主主義と人文科学との関連を掘り下げて説明することが必要だろう。

響は、短期間で測定されるべきではない³⁵。

2.1.3. 官僚化

人文社会科学の研究において、第三のミッションが評価されるプロセスを疑問視する議論もある。この評価プロセスは、行政上の重荷、コスト³⁶、官僚的思考の上にはじめて成り立つものである。したがって、第三のミッションの評価は、研究者に面倒な仕事を押し付ける余計な束縛になりかねない。

2.2. イタリアのアプローチ

第三のミッションの評価に対するイタリアの基本的なアプローチは以下のようなまとめが可能である³⁷。

- 人文社会科学に対して、社会に対してどのようなインパクトを与えているか示すよう求めることは、それ自体正当な要求である。
- 他方、それにとどまらないメリットもある。社会に対するインパクトを示すことは、人文社会科学研究の地位の向上につながるとも考えられるからだ。
- 必要なのは、人文社会科学研究の特殊性を尊重する、洗練されたインパクトモデルに基づいた評価のプロセスを確立することである。

これらの視点に基づき、イタリアは以下の諸点を含む実質的な選択を行っている。この選択ゆえに、第三のミッションをどう評価するかに関するイタリアの事例は興味深いケーススタディに

³⁵ 同様の見解として Sigurðarson (2020) 参照。彼は、アマルティア・センの潜在能力アプローチなどを引きながら、人文社会科学が社会に対してもたらし得るインパクトを例証する。例えば、アイスランド語の手話文法の研究によって、手話の地位に関する法整備が進んだ。それだけでなく、手話を自らの言語として自信をもって使用できる聾啞者の学生が増え、手話が公共の場でより受け入れられるようになった、との報告がなされている。これらは、長い時間をかけて徐々に実現される、定量的指標によっては計測しがたいインパクトの好例だろう。Reale et al. (2018) も、人文社会科学のインパクト評価において定量的指標に過度に依拠することに対して警鐘を鳴らす。

³⁶ 特にピアレビュー方式のコストや構造上の問題に関しては、Bedessem (2020) のまとめが有益。異なるアプローチとして、Philipps (2021) も参照。しかし、様々な課題はあるものの、Wilsdon (2016) ch. 10 は、研究評価においてはピアレビューを主として用い、定量的指標はあくまで補助的に用いるべきだと訴える。日本学術会議 (2021) の提言も参照。

³⁷ Blasi et. al. (2018), 372-79. 本書の Lanzillo (2018) の論考でも、人文社会科学が社会に対して及ぼし得る広範なインパクトについて考察される。同時に、そうしたインパクトの定義・評価の手続きに関しては、なお大きな課題が残されていることが指摘される。

なることが指摘されている。

2.2.1. 包括的定義

イタリアはまず、第三のミッションの定義を拡張した。これにより、特許やスピンオフのような経済的価値をもたらすことだけでなく、文化遺産の維持、公衆衛生への貢献、生涯学習、パブリックエンゲージメントなど、公共善に寄与する営みも第三のミッションに含まれることになった³⁸。第三のミッションは、大学がもたらすあらゆるインパクトを含むものとして再定義された。

2.2.2. インフォームド・ピアレビューと「成熟 (maturity) モデル」

イタリアが選んだ評価のための方法は、指標ベースの評価とピアレビューの混合である（インフォームド・ピアレビュー）。第三のミッションのそれぞれの領域の専門家が、当該領域の評価に最適だと自らが考える基準を採用する。こうした基準の選定に際しては、国際的な論争状況や利用可能な指標の質が考慮に入れられる。こうして、第三のミッションの諸領域は、それぞれ異なる方法論を用いて評価可能になる。結果として、互いに比較不可能な評価のスケールと評点が、領域ごとに生み出されることになる。インフォームド・ピアレビューを領域に応じて柔軟に運用するこのような評価方法は、「成熟 (maturity) モデル」と呼ばれる。

2.2.3. 第三のミッションの評価の自律

イタリアの VQR では、第三のミッションもまた評価対象となる。しかし、第三のミッションの評価の結果は、VQR の最終スコアには反映されない。この最終スコアは、大学のパフォーマンスに基づいたファンディング (FFO) のための計算式で用いられ、政府からの補助金のうち 30% までがこのファンディングで占められる。

この選択は、英国の REF³⁹と対照的である。REF では、研究のインパクト評価の結果が最終ス

³⁸ こうした「拡張」の試みが「インパクト」について必要であるとの議論として、標葉 (2020) 参照。林 (2018) は、日本における人文社会科学のインパクトの実例として、『御堂関白記』のユネスコ記憶遺産登録に繋がった総合研究大学院の「日記の総合的研究」や、WHO の白書作成に寄与した東京大学の「自殺対策の経済学」などに言及する。様々な社会的インパクトの分類・整理のひとつの試みとして、Sivertsen and Meijer (2020) も参照。

³⁹ REF のインパクト評価に関わる諸問題は、Smith et. al. (2020) において詳細に議論されている。特に重要な論点として、REF のインパクト評価によって、科学と社会の間の断絶がむしろ助長される可能性があるとの指摘がある。REF のインパクト評価のスキームでは、研究者はインパクトに対する自らの貢献を明確に述べることを求められている。そのため、一方的で利己的な語りが研究者によって生み出され、研究に協力したアカデミア以外の人々の働きが、排除あるいは周辺化されてしまう危険性がある。Smith et. al. (2020), 183-84 参照。

コアに反映され、その割合は、2014 年の実施では 20%、2021 年の実施では 25%に及ぶ⁴⁰。

イタリアがこの選択を下した背景のひとつとして、REF のような評価方法に対する次のような懸念がある。REF では、インパクト評価の結果が最終スコアに反映されるため、研究の質の低さをインパクト評価の高さで補うことが可能となってしまう。すなわち、本来別々のものであるはずのインパクトと研究の質とが、事実上トレード可能なものになってしまいかねない、との懸念である⁴¹。

イタリアでは、研究と教育は大学のすべてのスタッフ（教員）の義務とみなされている一方、第三のミッションは、スタッフの全員がそれぞれ行うべき義務とはみなされていない。むしろ、第三のミッションに関して責任を負うべきは、スタッフ個々人ではなく、彼ら・彼女らが属する機関（institution）であるとされる⁴²。

⁴⁰ 最高評価の★4を得たインパクト事例は、£ 350,000もの金銭的価値をもつと見込まれている。そのため、申請者がインパクトを描写する語りの妥当性に関して、粉飾の懸念が評価者の視点から表明されている。Smith et. al. (2020), 189-91 参照。研究評価がもたらす金銭的報酬の孕む問題について、Ma (2019) はユニバーシティ・カレッジ・ダブリンの事例をもとに議論している。

⁴¹ 実際は、REF の最終スコアにおいて「インパクト」が占める割合は（2021年においても）25%に過ぎないため、「研究の質」において低い評点しか与えられていない研究機関が、「インパクト」の評点の高さによって逆転するような状況が生まれるとは考えにくい。Blasi et al. (2018), 376-77 の論述からは、当該の懸念のさらなる背景には、「研究の質」を独立の領域として純粋なままに保持したいという、イタリアの研究者の強い意向があることが読み取れる。

⁴² 第三のミッションに関連して、大学などの研究機関と知識使用者を仲介し、知識の共創を促す、「知識ブローカー」と呼ばれる個人あるいは機関の働きの重要性が指摘されている。「知識ブローカー」の役割をどのように捉えるべきかに関しては、Smith et al. (2020) ch. 7; Dewaela et al. (2021) が詳しい。現代の哲学者には「知識ブローカー」的な役割が要請されているとする（論争含みの）提案として、Rorty (1979) ch. 8 も参照。

3. 研究の「質」の理解に対するひとつのアプローチ

最後に、研究の「質」の理解に関するズッカラの議論⁴³を紹介する。ズッカラによれば、研究評価は、研究の質を扱う営みであり、一種の文化（そして実は、多元的な文化）であるという。したがって、文化が（ひとつには）言語を通じて表現されるものである以上、「質」というタームもまた、特定の文脈・文化に強く結びついたものとなる。

3.1. 地域性と結びついた「質」——“regola d’arte”

以上の論点を例証するためにズッカラが訴えるのが、“regola d’arte”というイタリア語の表現である。直訳すると「技芸に従って」を意味するこの表現は、物事の性質がすぐれていることを表わすためにしばしば用いられる。

すなわち、イタリア人の心情では、何かあるものが高い質を保持しているとは、そのものが「巧みに」取り扱われていることを意味する。それゆえイタリア人にとって、質（の高さ）は巧みさと類似した概念である。

ズッカラ自身は明記していないものの、これは、イタリア語の“arte”の語源であるラテン語の“ars”が（古代ギリシア語の対応語である“*technē*”同様）もともと、質の高さと強い結びつきをもつ言葉であることが、背景にあると考えられる。一般に、古代ギリシア・ローマ人にとって、あるものが *ars* あるいは *technē* に従って作り出されるということは、そのものが価値（高い質）をもっていることを含意していた。ラテン語由来の文法・語彙を相当程度保持しているイタリア語には、こうした思考の伝統が残っており、そのことが研究の「質」をめぐる議論においても影響している可能性がある。

3.2. 時代と結びついた「質」——“sprezzatura”

⁴³ Zuccara (2018).

ズッカラが検討するもうひとつの例は、“sprezzatura” という語である。“sprezzatura” は、ルネサンス期の外交官・著述家であるバルダッサレ・カスティリオーネの『宮廷人』（*Il libro del cortegiano*）で初めて現れた造語で、そこでは、廷臣がもつべき美德を表すために使用された。

カスティリオーネ自身の規定によれば、“sprezzatura” とは「技巧を隠して、自分の言行が、苦勞なしに、ほとんど無意識になされたと見せかける」⁴⁴ことである。すなわち、すぐれた廷臣は、たくさんの困難な仕事を、そのために費やした意識的な努力を感じさせることなく、平然とこなす能力をもつべきとされたのである。

『宮廷人』は、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ポーランド語、英語などに次々と翻訳され、ヨーロッパ上流階級において、紳士のあるべき姿を提示する模範書として数百年に渡って強い影響力をもった。少なくともその時期のイタリアの上流階級において、“sprezzatura” は「質」と強い結びつきをもっていた概念であると言える。

だが現代イタリア語では、“sprezzatura” は、質の高さ（美德）を表すためにはほとんど用いられていない。そもそもこの語は、日常的にはあまり用いられなくなっている。また、仮に用いられる場合であっても「わざとらしい冷淡さを伴った、表面上の無頓着な態度」といったニュアンスを概してもつようになってしまった。現代のイタリア語で、誰かが“sprezzatura” を有していると言われる場合には、近世とは異なり、否定的なニュアンスが伴うことが多い。

このように「質」をめぐる言葉一つとっても、その意味射程と背景は複雑な文脈を負っている。そして、研究評価の「質」をめぐる議論自体がそのような言葉の性質を引き受けながら展開されていくという点は、今後の研究評価の議論を考える上でも示唆的であろう。

3.3. まとめ

ズッカラの議論は、ある地域にはその地域特有の「質」の理解の仕方があり得ること、そして、互いに異なる文化をもつ学問分野もまた、研究の「質」に関して異なる理解をもち得ることを例示している⁴⁵。「質」の理解に関する、いわば水平方向の差異である。また、同一地域の文化内

⁴⁴ 原文は次の通り。“... che nasconda l'arte e dimostri ciò, che si fa e dice, venir fatto senza fatica e quasi senza pensarvi ...” Book I, XXVI.

⁴⁵ 研究評価において「価値」や「質」に関する議論が不足していることは、Donovan et al. (2018), 285; Pederson et al. (2020), 15-16 などが指摘している。人文科学の研究者が研究の「質」をどのように理解しているかに関する、小規模

においても、「質」の理解は、時間の経過とともにその内実を変容させていく。いわば垂直方向の差異である。それ自体が一種の文化である研究評価をめぐる言説・実践においても、こうした両方向の差異への細やかな目配りが必要とされるのは言うまでもない。

ながら示唆に富むインタビュー調査として Ochsner et. al. (2016) 参照。本書の冒頭を飾る Bonaccorsi (2018a) の論考でも、人文社会科学のコミュニティがどのように知識を生産し、評価しているかに関する体系的な分析（認識的アプローチ）が必要であるとの提案がなされる。Smith et al. (2020), 203 は、インパクト評価における「倫理」の考察に向けられた会話と道具立てを作り出す必要性を訴える。

参考文献

- Bonaccorsi, A. ed., 2018, *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer.
- Agenzia Nazionale di Valutazione del Sistema Universitario e della Ricerca, 2022, ANVUR's Website (Retrieved March 18, 2022, <https://www.anvur.it/>).
- Basili, C. and Lanzillo, L., 2018, "Research Quality Criteria in the Evaluation of Books," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 159-84.
- Bedessem, B., 2020, "Should We Fund Research Randomly? An Epistemological Criticism of the Lottery Model as an Alternative to Peer Review for the Funding of Science," *Research Evaluation*, 29 (2): 150-57.
- Benneworth, P., Gulbrandsen, M., and Hazelkorn, E., 2016, *The Impact and Future of Arts and Humanities Research*, London: Palgrave Macmillan.
- Biagetti, M. T., Iacono, A., and Trombone, A., 2018a, "Is the Diffusion of Books in the Library Holdings a Reliable Indicator in Research Assessment?," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 321-43.
- Biagetti, M. T., Iacono, A., and Trombone, A., 2018b, "Quality Evaluation of Online Library Catalogues, Advanced Discovery Tools and Linked Data Technologies," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 185-209.
- Biolacti-Rinaldi, F., Molteni, F., and Salini, S., 2018, "Assessing the Reliability and Validity of Google Scholar Indicators. The Case of Social Sciences in Italy," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 295-319.
- Blasi, B., Romagnosi, S., and Bonaccorsi, A., 2018, "Do SSH Researchers Have a Third Mission

- (And Should They Have)?" A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 361-92.
- Bonaccorsi, A., 2018a, "Towards an Epistemic Approach to Evaluation in SSH," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 1-29.
- Bonaccorsi, A., 2018b, "Peer Review in Social Science and Humanities. Addressing the Interpretation of Quality Criteria," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 71-101.
- Bonaccorsi, A., Ferrara, A., and Malgarini, M., 2018, "Journal Ratings as Predictors of Article Quality in Arts, Humanities, and Social Sciences: An Analysis Based on the Italian Research Evaluation Exercise," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 253-67.
- Bourdieu, P., 1984, *Homo Academicus*, Paris: Les Editions de Minuit.
- Bosso, A., Galleron, I., Lippiello, T., and Williams, G., 2017, "The Role of Books in Non-Bibliometric Areas (RobinBa)," ANVUR Working Papers no. 2.
- Castiglione, B., *Il libro del cortegiano*. (C. S. Singleton, trans, 1959, *The Book of the Courtier*, New York: Anchor.) (清水純一・岩倉具忠・天野恵訳注, 1987, 『カステリオーネ——宮廷人』東海大学出版会.)
- Dewaele, A., Vandael, K., Meysman, S., and B Interactions in Buysse, A., 2021, "Understanding Collaborative Interactions in Relation to Research Impact in Social Sciences and Humanities: A Meta-ethnography," *Research Evaluation*, 30 (2): 179-90.
- Donovan, C. and Gulbrandsen, M., 2018, "Introduction: Measuring the Impact of Arts and Humanities Research in Europe," *Research Evaluation*, 27 (4): 285-86.
- Faggiolani, C. and Solimine, G., 2018, "Mapping the Role of Book in Evaluation at the Individual and Department Level in Italian SSH. A Multisource Analysis," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the*

Italian Experience, Cham: Springer, 33-53.

Ferrara, A., Montanelli, S., and Verzillo, S., 2018, "Google Scholar as a Citation Database for Non-bibliometric Areas: The EVA Project Results," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 271-93.

Foucault, M., 2001, "La « gouvernamentalité »," M. Foucault ed., *Dits et écrits, II: 1976-1988*, Paris: Gallimard, 635-57.

Iezzi, D. F., 2018, "Publication Strategies in SSH: Empirical Evidence and Policy Implications," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 233-51.

Lanzillo, L., 2018, "The Social Impact Assessment in Social Sciences and Humanities: Methodological Issues from the Italian Experience," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 345-59.

Ma, L., 2019, "Money, Moral, and Motivation: A Study of the Output-Based Research Support Scheme in University College Dublin," *Research Evaluation*, 28 (4): 304-12.

Nussbaum, M. C., 2012, *Not for Profit: Why Democracy Needs the Humanities*, Princeton: Princeton University Press. (小沢自然・小野正嗣訳, 2013, 『経済成長がすべてか? — デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波書店。)

Ochsner, M., Hug, S. M., and Daniel, H., 2016, "Humanities Scholars' Conception of Research Quality," M. Ochsner, S. M. Hug, and H. Daniel eds., *Research Assessment in the Humanities: Towards Criteria and Procedures*, Cham: Springer, 43-69.

Pederson, D. B., Grønvad, J. F., and Hvidtfeldt, R., 2020, "Methods for Mapping the Impact of Social Sciences and Humanities—A Literature Review," *Research Evaluation*, 29 (1): 4-21.

Perugimelli, G. and Faro, S., 2018, "Research Quality Evaluation: The Case of Legal Studies," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 103-29.

Perugimelli, G., Faro, S., and Agnoloni, T., 2018, "A Survey on Legal Research Monograph

- Evaluation in Italy,” A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 211-30.
- Philipps, A., 2021, “Science Rules! A Qualitative Study of Scientists’ Approaches to Grant Lottery,” *Research Evaluation*, 30 (1): 102-11.
- Reale, E., Avramov, D., Canhial, K., Donovan, C., Flecha, R., Holm, P., Larkin, C., Lepori, B., Mosoni-Fried, J., Oliver, E., Primeri, E., Puigvert, L., Scharnhorst, A., Schubert, A., Soler, M., Soès, S., Sordé, T., Travis, C., and Horik, R. V., 2018, “A Review of Literature on Evaluating the Scientific, Social and Political Impact of Social Sciences and Humanities Research,” *Research Evaluation*, 27 (4): 298-308.
- Rorty, R., 1979, *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton: Princeton University Press. (野家啓一監訳, 1993, 『哲学と自然の鏡』産業図書。)
- Sigurðarson E., 2020, “Capacities, Capabilities, and the Societal Impact of the Humanities,” *Research Evaluation*, 29 (1): 71-76.
- Sivertsen, G., 2016, “Publication-Based Funding: The Norwegian Model,” M. Ochsner, S. M. Hug, and H. Daniel eds., *Research Assessment in the Humanities: Towards Criteria and Procedures*, Cham: Springer, 79-90.
- Sivertsen, G. and Meijer, I., 2020, “Normal versus Extraordinary Societal Impact: How to Understand, Evaluate, and Improve Research Activities in their Relation to Society?” *Research Evaluation*, 29 (1): 66-70.
- Smith, E., Bondola-Gill, J., Meer, N., Stewart, E., and Watermeyer, R., 2020, *The Impact Agenda: Controversies, Consequences and Challenges*, Bristol: Policy Press.
- Sörlin, S., 2018, “Humanities of Transformation: From Crisis and Critique towards the Emerging Integrative Humanities,” *Research Evaluation*, 27 (4): 287-97.
- Taylor & Francis, 2022, “Accelerated Publication,” (Retrieved March 18, 2022, <https://taylorandfrancis.com/partnership/commercial/accelerated-publication/>).
- Williams, G., Basso, A., Galleron, I., and Lippiell, T., 2018, “More, Less or Better: The Problem of Evaluating Books in SSH Research,” A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 133-58.

- Wilsdon, J., 2016, *The Metric Tide: the Independent Review of the Role of Metrics in Research Assessment & Management*, Los Angeles: SAGE.
- Zuccala, A., 2018, "Language, Culture and Traversing the Scholarly Evaluation Landscape," A. Bonaccorsi ed., *The Evaluation of Research in Social Sciences and Humanities: Lessons from the Italian Experience*, Cham: Springer, 395-411.
- 佐野幸人編, 2020, 『東アジアの人文・社会科学における研究評価——制度とその変化』アジア経済研究所.
- 標葉隆馬, 2017, 「人文・社会科学を巡る研究評価の現在と課題」『年報 科学・技術・社会』26: 1-39.
- 標葉隆馬, 2020, 『責任ある科学技術ガバナンス概論』ナカニシヤ出版.
- 関沢和泉, 2021, 「イタリアの評価機関 ANVUR による認証評価概観」大学情報・機関調査研究会『第 10 回大学情報・機関調査研究集会論文集』大学情報・機関調査研究会, 140-45.
- 内閣府, 2021, 『科学技術・イノベーション基本計画』, (最終アクセス 2022 年 3 月 18 日, <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/6honbun.pdf>) .
- 日本学術会議, 2020, 『提言 学術の振興に寄与する研究評価を目指して一望ましい研究評価に向けた課題と展望』, (最終アクセス 2022 年 3 月 18 日, <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-t312-1.pdf>) .
- 林隆之, 2018, 「人文学・社会科学における研究評価の課題——大学評価の現場における現在進行形」『第 4 回人文・社会科学系研究推進フォーラム報告書——人文・社会科学研究の未来像を描く』京都大学学術研究支援室, 32-51.
- 林隆之, 齊藤貴浩, 水田健輔, 米澤彰純, 川村真理, 安藤二香, 2020, 「大学評価と運営交付金配分の一体的改革の在り方」SciREX-WP.
- 林隆之, 藤光智香, 秦佑輔, 中渡瀬秀一, 安藤二香, 2021, 「研究成果指標における多様性と標準化の両立——人文・社会科学に焦点を置いて」SciREX-WP.

ELSI NOTE No. 16

イタリアにおける研究評価をめぐる議論の概要

令和4年3月24日



大阪大学 社会技術共創研究センター
Research Center on Ethical, Legal and Social Issues

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-8
大阪大学吹田キャンパステクノアライアンス C 棟 6 階
TEL 06-6105-6084
<https://elsi.osaka-u.ac.jp>

